

編集後記—医学生

勤務先が大学から病院に変われば学生教育や研修指導とは縁が切れると考えていた。ところが、実際にはそうでもない。初期研修医は常にいるし、毎月6年生や別の研修医が実習や研修で訪ねてくる。また、私が大学に勤務していた時代にクラス担任として受け持っていた学生が医師として入職してきて一緒に働く機会も多くなった。

病院医局主催の歓迎・送別会や納涼・忘年会でそのような医師と会うとクラスメートの近況などが話題になることが多い。これが実は貴重な機会となる。自分が授業や進路指導を担当した学生の「真の教育成果（アウトカム）」を知ることができるためである。また、FacebookなどのSNSにより画像や動画で彼らのリアルな状況を知ることできる。最近はまだICTの進歩の恩恵に浴しているともいえる。

ところで、学生名簿をみて不思議に思うことがある。大部分の学生を思い起こすことができるクラスもあるが、年度によっては思い浮かべることができるのがわずか数名しかない。私なりにこの理由を考えてみたが未だに納得できるような答を得ていない。自分が内科の教室に所属している時期に教育担当となり授業や試験の採点を行った学生は比較的よく覚えている。また、模擬患者やシミュレータ学習などの新しい授業に取り組んだ時期は学生との接触が濃厚だった。一方、附属病院で大きな医療事故があった年や大学が法人化した時期に担当したクラスの印象はやや薄い。大学組織の変化が教育活動にも影響した可能性があるが、そうだとすれば大いに反省しなくてはならない。

十数年にわたりクラス担任として国内外の留学、卒業後の進路、その他様々な日常の悩み事の相談に応じてきたが、今でも鮮明に覚えていることがある。フリークォータという自由学習期間を設けていたのであるが、東南アジア、中東、アフリカに長期に滞在するような学生もいて、JICA（国際協力機構）等の知り合いと相談しながら話を進めたものの、無事に帰ってきてホッとした記憶がある。横須賀米海軍基地から医師を招いて医学英語の学習サークルを作ったところ、欧米の医療に興味を抱く学生が増えて2割近い学生が米国に留学した学年もあった。学生時代に多様な活動をしたものは卒業後も米国などで研究や診療活動を行う傾向が強いようである。

他方、医学部に入って目標を見失ってしまった学生も少なくなかった。北海道や九州以南から出てきて下宿し、家族と離れ、友人を失い、一人の生活に慣れず苦しんでいるものもいた。新しい友人を求めてアルバイトに奔走している学生もいた。教養課程では何とか授業について行けたものの、解剖実習などの基礎医学の学年になると適応障害に陥るものも現れた。数年間、留年を繰り返してやっと卒業できた学生、国家試験や卒業後の研修のストレスに喘いでいるものもいた。個人的な印象ではあるが、他大学を卒業してから入学したものや地方出身の女子学生にとっては負荷が大きかったように思われる。

しかし現在、学生や研修医時代に苦しい思いをしても、各方面で活躍している医師が大部分である。今後もますます発展してくれるよう願っている次第である。

（後藤英司）